

平成26年度 スーパー食育スクール事業 事業結果報告書

都道府県名	徳島県
学 校 名	阿波市立伊沢小学校
学校のホームページアドレス	http://e-school.e-tokushima.or.jp/awa/es/isawa/html/htdocs/?page_id=85

1 取組テーマ

地域に根ざし、「食」を通して言語能力を育成するとともに、
生産活動に対する肯定感を高める食育プログラムの開発

2 栄養教諭の配置状況

栄養教諭配置年及び人数	年	0人
配置されていない場合の対応状況	阿波市学校給食センター栄養教諭（阿波市立阿波中学校）と連携し、事業計画の進行に協力を得ている。	

3 推進委員会の構成

委員長	岡本 弘子	伊沢小学校校長
副委員長	高田 稔	阿波市教育委員会教育次長
委員	濱井 俊洋	徳島県教育委員会体育学校安全課防災・健康教育幹
	藤島小百合	徳島県教育委員会体育学校安全課指導主事
	亀田 佳子	徳島県立総合教育センター教職員研修課指導主事
	妹尾 明	阿波市産業経済部次長
	日岡 健二	伊沢小学校教務主任
	樽見由梨香	伊沢小学校養護教諭
	後藤 和世	伊沢小学校食育リーダー
	横田 恵子	阿波市学校給食センター栄養教諭
	廣瀬 祐史	徳島県東部農林水産局吉野川庁舎吉野川農業支援センター次長
	前田 典子	徳島県東部農林水産局吉野川庁舎吉野川農業支援センター主任
	三好 敬仁	伊沢小学校PTA会長
	重清 純子	日本野菜ソムリエ徳島・阿波支部長
	稲井 由美	阿波市観光協会事務局長・阿波ベジ☆プロジェクト代表
	篠原えり子	阿波市人権擁護委員会会長・いのちのリレープロジェクト代表
	高橋 啓子	四国大学（生活科学部）教授
	山本 哲生	四国大学（生活科学部）准教授
	大塚 明廣	大塚内科医師
	安田 勝裕	安田歯科医師
	武田真由美	料理研究家
	武澤 輝昭	阿波町農業協同組合販売課次長
	武澤 豪	市内生産者・阿波市農産物観光PR隊「GOTTSO 阿波」代表
	金井 昭男	農地水資源環境保全隊代表

計 24名

4 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
阿波町農業協同組合	栽培体験活動の支援，体験活動，出前授業等
農地水資源環境保全隊	栽培体験活動の支援
いのちのリレープロジェクト (阿波市人権擁護委員で構成)	地元産の野菜の種から実への観察と収穫した野菜の調理を通して，いのちを大切にしている内容の出前授業を実施
四国大学生生活科学部管理栄養士養成課程及び児童学科	評価方法のアドバイス，体験を通じた学び（ウェビングマップ・テキストマイニング）の科学的データの分析，検証
大塚 明廣（内科医）	生活習慣病予防からのアドバイス
安田 勝裕（歯科医）	歯の健康・咀嚼についての出前教室，咀嚼力データの分析等

5 実践内容

事業目標
① 地場産野菜の栽培や地域の生産者等と連携した食育プログラムの作成とともに，その実践を通して，子ども自らが食生活を改善し，生活習慣病予防に向けた望ましい食習慣を身につけることができるようにする。
② 野菜摂取を啓発する学習を展開し，食生活における課題を改善する。
③ 食育を通して，子どもの言語能力や言語活動に対する意欲・態度を向上させる。

評価指標
<p>評価指標 1</p> <p>学習前後の子どもの作文等をテキストマイニングにより，あらかじめ設定した類型で分析し，特定の語彙の出現の頻度や共出現の相関などを解析する。作文の文章量・語彙等を食育プログラムの実施前後で比較し，プログラムと言語事項の充実の手だてを関連づけた指導が有効であることを検証する。</p>
<p>評価指標 2</p> <p>栄養教諭と連携し，摂取野菜の量や種類，朝食の内容などについて，全学年を対象に食生活調査を実施する。</p>
<p>評価指標 3</p> <p>栄養教諭と連携し，『食育だより』の発行回数を従前より増やす。また，『給食献立レシピコンクール』を年3回（各学期）実施する。</p>
<p>評価指標 4</p> <p>本事業の取組を「学校だより」，「学年だより」，「学校ホームページ」等で，積極的に公開する。『指導事例集』，『活動報告集』（各450部）を刊行し，研究成果を広く周知する。</p>

評価方法
<p>指標 1 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・四国大学と連携したウェビングマップ，テキストマイニング等の分析，効果測定 ・食育全体計画の見直しと改善を推進委員会で評価 ・食生活学習教材（文部科学省）の中学年6項目，高学年10項目による評価
<p>指標 2 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食生活調査の実施
<p>指標 3 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阿波市給食センターとの連携を推進委員会で評価
<p>指標 4 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開状況を推進委員会で評価



評価指標を向上させるための仮説(道筋)

地域の「ひと」「もの」「こと」に豊かにかかわった食育プログラムを展開する。このプログラムは、子どもの五感を刺激し、多くの発見や感動をもたらすように設定する。

仮説 1

食育プログラムにおける学びを通して、子どもは発見したことや感動を身近な周りの人に伝えようと五感を働かせ実感を伴った言葉で表現しようとする。また、食育プログラムは問題解決学習を基盤としており、自ら進んで学び、思考し、知識や技能を獲得する過程で言語活動が充実していくと考える。

仮説 2

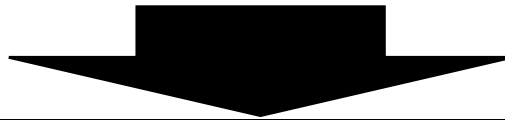
食習慣指導プログラムが教科等の言語活動にどのように教育的な効果をもたらすかを分析、検証することで、教科等の指導方法の工夫改善が図られる。

仮説 3

地域に根ざした食育プログラムを実践することで、子どもの地域理解が深まり、「子どもと子ども」、「子どもと家庭」、「子どもと地域」との絆が深まる。

仮説 4

食生活調査の結果を積極的に家庭や地域に周知するや阿波市給食センターとの連携を通して、家庭や地域ぐるみで、食生活の改善を図ろうとする気運を高める。



実践内容

○具体的な取組

1 学校食育推進体制の整備

- ① 食育推進委員会組織の整備
- ② 事業計画の検討
- ③ 食育先進校等視察
 - ・ 第9回食育推進全国大会、京都市立下京渉成小学校
- ④ 食育講演会の開催
 - ・ 高橋 啓子(四国大学生活科学部管理栄養士養成課程教授)講演会
 - ・ 大塚 明廣内科医師, 安田 勝裕歯科医師による講演会
- ⑤ 食育及び言語事項に関する研修会
 - ・ 徳島県総合教育亀田指導主事を招聘した研修会
 - ・ 四国大学山本準教授を招聘した研修会(言語感覚, 語彙力向上等)
 - ・ 研究授業及び授業研究会(全学年)
 - ・ 四国大学高橋教授を招聘した研修会(食育の現状と課題, ライフステージ毎の食育等)
 - ・ 四国大学山本準教授を招聘した研修会(食育と言語表現, 食感のオノマトペ等)
 - ・ 京都市立下京渉成小, お茶の水女子大学附属小学校(指定校)との情報交換会

2 食習慣指導プログラムの開発(1~6年)と「言語事項の充実」との関連性の解明

- ① 地域の生産者と連携し、食育の6つの目標を踏まえた食習慣指導プログラムの開発
- ② 料理研究家や野菜ソムリエ等との調理(地場産野菜の活用, 伝統食)の実施

〈 具体的な実践事例 〉

「精進料理」でオノマトペ!(5年生)

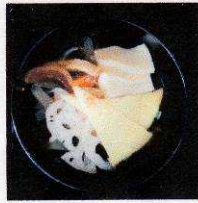
地域の伝統食である「精進料理」を地域の方の協力を得て作った。「精進料理」は、魚や肉を使わずに調味料を押さえて食材の味を生かし、また食材を全て有効に使う料理である。食物繊維, ビタミン, ミネラルなど不足しがちな栄養が多く生活習慣病の予防にも役立つ。



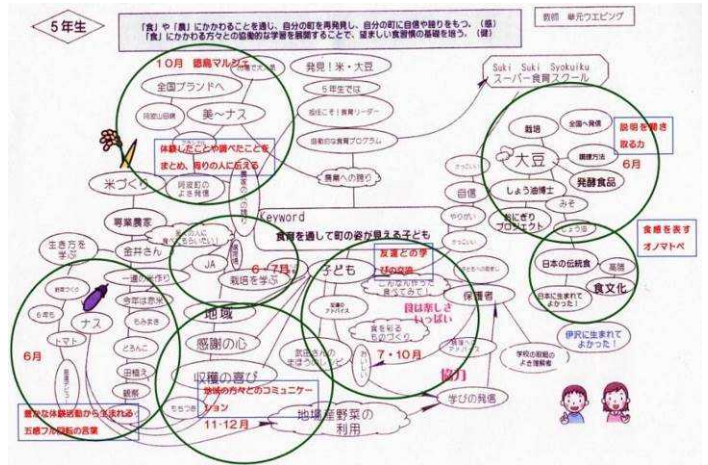
今回は、地域の食文化に親しませたい思いから、地域に大事に保管され冠婚葬祭で利用する漆塗りの高膳に料理をよそった。整然と並んだ高膳の前では、子ども全員が指示もないのに背筋をまっすぐ伸ばし正座であった。この姿は日本人として大切に受け継がれた感性の表れであるし、調理を教えてくれた人や食材や高膳を用意してくれた人への感謝を込めた姿だったと思われる。



〈図1 精進料理と「オノマトペによる食材の表現」(一部)〉

<p>ならえ</p> 	<p>大根がカリカリしていて、酢の味がよくきいていた。 ならえのレンコンは、カリカリ(シャキシャキ)していた。 ならえの豆腐はおいしくて、モグモグ食べた。 ならえは、少ししょっぱかったけれど、私は、ムシヤムシヤ食べた。 豆腐は、味がしみこみ、口の中でジュルジュルと汁が出てきた。 レンコンを食べると、シャリシャリと音がした。</p>
---	---

- ③ 指導計画作成と単元ウェブページマップの作成
- ④ 食にかかわる体験を通して「身につけさせたい基礎的・基本的語彙」(全学年)の作成
- ⑤ 「身につけさせたい基礎的・基本的語彙」の実態調査
- ⑥ 食育プログラムと学習指導要領(国語科の指導事項)との関連づけた計画立案と、他教科へ波及する指導者の指導の手だての工夫改善方法の解明
- ⑦ 成果報告会の実施



3 栄養教諭と連携した食生活調査や学校給食充実に向けた取組

- ① 食生活調査(阿波市給食センター提供の各小学校対象)の実施
- ② 栄養教諭と連携した「食育五七五」と「給食献立メニューコンクール」の実施
- ③ 『食育だより』の発行

4 「スーパー食育スクール」事業の取組及び成果発信

- ① 「学校便り」, 学校ホームページ等での積極的な公開
- ② 阿波市ケーブルネットの映像による家庭や地域への取組周知
- ③ 徳島新聞や広報「あわ」への記事掲載による家庭や地域への広報
- ④ 阿波市観光協会やとくしまマルシェ実行委員会, 吉野川保健所などと連携し, 「阿波 de フェスタ」や「とくしまマルシェ」, 「からだによし! のがわフェスティバル」での成果発表及び表現活動
- ⑤ 学校食育推進研修会における取組発表
- ⑥ 『指導事例集』, 『活動報告集』(各450部)を発行し, 徳島県内小学校・中学校・高等学校・特別支援学校及び関係機関等に配布した。

6 成果

地域の生産者等と連携し、食生活改善に向けた食習慣指導プログラムを開発することにより、地場産野菜のよさの理解や地域の方々との交流を通して、地域への愛着や郷土に対する誇りをもつ子どもが増えた。また、料理研究家や野菜ソムリエ等との地場産野菜の調理や伝統食の調理を各教科等と関連づけて実施することや、管理栄養士や内科医、歯科医等の講演を通して、子どもや保護者が自らの食生活を振り返り、食生活を改善しようとする意欲の高まりを感じる。

「五感フル回転の言語活動」や「食感を表すオノマトペ」, 「伝える極意！」など, 食習慣指導プログラムと言語活動を関連づけて指導することで, 子どもの言語能力等の向上が見られる。また, ワークシートや発問の工夫, 子どもの主体的な学習の場の設定など, 指導方法の工夫改善が図られ, 教師の指導力向上につながっている。テキストマイニングによる客観的データの分析で, 食育プログラムと言語事項を関連づけた指導が有効であることが分かった。

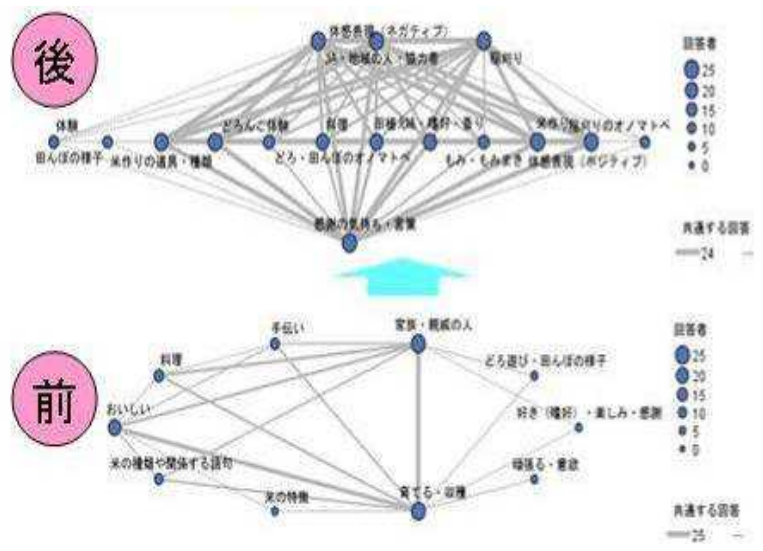
カテゴリー	%	語句	人数
育てる・収穫	96.2	49	25
家族・親戚の人	96.2	23	25
食べる	73.1	3	19
料理	53.8	23	14
米の種類や関係する語句	50.0	11	13
米の生産に関すること	46.2	7	12
手伝い	42.3	8	11
好き(嗜好)・楽しみ	34.6	4	9
どろ遊び・田んぼの様子	26.9	8	7
ご飯の食感	19.2	7	5
米の特徴	19.2	5	5
苦労する	15.4	3	4



カテゴリー	%	語句	人数
感謝の気持ち・言葉	96.2	47	25
体感表現(ネガティブ)	92.3	62	24
体感表現(ポジティブ)	92.3	52	24
どろんこ体験	92.3	46	24
学び・教えてもらう(人)	92.3	35	24
稲刈り	92.3	22	24
米作り	92.3	9	24
米作りの道具・種類	88.5	16	23
味・嗜好・香り	80.8	48	21
田植え	80.8	22	21
料理	76.9	40	20
オノマトペ(栽培)	73.1	28	19
もみ・もみまき	57.7	5	15
体験	50.0	4	13
達成感・意欲	42.3	10	11
大切さ・学んだこと	38.5	11	10
育つ	30.8	7	8
感動・驚き	30.8	5	8
オノマトペ(食べ物)	19.2	5	5
小動物	11.5	7	3
作業・収穫	11.5	4	3
栄養・健康	7.7	3	2

〈表1・図2 分析の一例〉
 分析方法 IBM マイニングソフト
 作文の題 「米作り」をテーマ
 実施月 5月(単元前)
 10月(単元後半)
 実施対象 5年生26名

体験前は, 「おいしい」「感謝」など経験から生じる感情を表す言葉を記述していたものは少なかった。一方, 米作り体験後は, 「感謝の気持ち・言葉」の表現が大変多くなり, どろんこ体験, 稲刈り, 高膳料理等経験したことを記述するとともに, これらを経験したときの気持ちを言葉に表し, さらにオノマトペ表現を頻繁に使用して気持ちを表していた。よって, そのときの情景や感情が伝わりやすい文章となっていた。時間的な経過を見ると最後は達成感や意欲へとつながっていた。他教科への波及効果として, ワークシートやMYディクショナリーカード, 発問の工夫, 子どもの主体的な学習の場の設定など, 指導方法の工夫改善が図られ, 教師の指導力向上につながっている。



7 スーパー食育スクール事業の取組状況の情報発信

- 1 学校ホームページでの取組状況の公開(78回)
- 2 阿波市ケーブルネットワークによる映像配信(4回)や徳島新聞への掲載(4回)
- 3 学年だよりの内容や公開状況について(102回)
- 4 成果刊行物の発行

8 今後の課題

- 家庭での実践化につながる計画的・継続的な指導にする。
- 食育プログラムの有用性を検証する評価の研究をおこなうとともに, 栄養教諭や養護教諭等とのさらなる連携をおこない, 食育プログラムの工夫改善を図る。
- 来年度は, 家族や地域の方々の言葉に込められた思いを感じ取る感性を育てるとともに, 培った言語能力を活用して, 地域に参画しようとする子どもの育成を図りたい。

